名古屋芸大グループ通信

26 January 2014

Feature

Foundation

〈特集〉

自分の興味を掘り下げる、可能性を発掘する

美術学部アートクリエイターブロック「ファンデーション」

Close up! NUA-ism
～進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-OG
自分にできることを
佐々木伸枝

NUA-Graduate student
大学院デザイン研究科
ライフスタイルデザイン研究 2年
大倉悠揮

News/Topics
ニュース&トピックス

大学総合
■ 芸大祭とミニオープンキャンパスが行われました
■ 第24回 生涯学習 大学公開講座を開講

音楽学部
■ 名古屋芸術大学フルートオーケストラのスペイン演奏旅行が行われました
■ あいちトリエンナーレ2013「祝祭ウィーク」舞台公演「ショービジネスに乾杯!」が上演されました

人間発達学部
■ 2013年度 子育ち・子育てワークショップ「にこにこワークショップ」が開催されました

美術学部・デザイン学部
■ あいちトリエンナーレ2013 パートナーシップ事業「まちかど芸術祭」が行われました
■ 美術学部特別客員教授 日野原重明氏による特別講演会が開催されました
■ 第8回 CBC「翔け! 二十歳の記憶展」で大岡優美さんがグランプリを受賞しました
■ 2013年度 アート&デザインセンター企画展が開催されました

グループ校特集
■ 学校法人 名古屋自由学院 滝子幼稚園

コラムNUA
「ふたつの転換期、ふたつの芸術大学」
美術学部教養部会教授　長田謙一

Master Artist
マスターアーティスト
自己の主張
大学院美術研究科　美術学部教授
大崎正裕

Information
インフォメーション
■ アワード
■ 2013年度 音楽学部 演奏会スケジュール
■ 2013年度 美術学部・デザイン学部卒業制作展、大学院修了制作展

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学グループ
http://www.nua.ac.jp

■名古屋芸術大学／大学院：音楽研究科 美術研究科 デザイン研究科 人間発達学研究科
学部：音楽学部 美術学部 デザイン学部 人間発達学部
■名古屋芸術大学保育・福祉専門学校
■名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園
■滝子幼稚園
■名古屋音楽学校（名古屋芸術大学 栄 サテライト）

Feature

＜特集＞

自分の興味を掘り下げる、可能性を発掘する

美術学部 アートクリエイターブロック

「ファンデーション」

Foundation

Find us on Facebook

アートクリエイター1年生美術文化基礎演習Ⅰ前期前田クラス

BGMバージョン（PC）
http://youtu.be/XVe8mZEfHZ0

アートが社会に果たす役割や社会から期待される役割は、増え続けています。アートによる町おこしや、美術館、博物館で行われるワークショップは特別なことではなくなりました。また、東日本大震災以降アートの役割の重要性は、改めて広く深く認知されています。ホスピタルアートや身障者によるアートなどアートに期待する新しい動きも増えています。それでは、実際に社会に対してアートで働きかけを実行していける人はどれくらいいるのでしょうか。十分とは言いがたい状況にあることは間違いありません。また、最近では、中学、高校で美術・音楽の授業時間が減少しており、技術的なことも意欲や関心さえも低下傾向にあるということも事実です。

この２つの流れをつなぐことが、芸術大学に求められていることだといえるでしょう。アートクリエイターブロックもこうした役割を担うものといえます。本学では、2008年にデッサンによる入試などを取り除きさまざまな可能性を持った人材を受け入れられる、アートクリエイター領域を設置しました。今年度からは、さらに自由度を高め、美術学部を、日本画、洋画１、洋画２の「絵画ブロック」と版画・平面、コミュニケーションアート、彫刻、陶芸・ガラス、美術文化からなる「アートクリエイターブロック」の２つに再編しました。アートクリエイターブロックの１年次に行われるファンデーションでは、美術分野全般のあらゆる基礎を学び、体験します。ファンデーションを経て２年以降の専門分野へつなげ、４年間で社会に応えるための能力、技術を身につけます。

1年次の学び　ブロック毎の基礎学習からスタート

ファンデーション

６分野から４つを選択

日本画基礎

油彩基礎

陶芸・ガラス基礎

美術文化基礎

コミュニケーションアート基礎

彫刻基礎

＋ 必修

デッサン

絵画基礎

2･3年次の学び　コースを選択し、専門的な学びへ。３年次には変更も可能

版画・平面 ⟷ コミュニケーションアート ⟷ 彫刻 ⟷ 陶芸・ガラス ⟷ 美術文化 ⟷ 絵画ブロック

今回の特集では、アートクリエイターブロック、ファンデーションを担当する３人の先生にお話を伺いました。三者三様、熱のこもった取り組みの一端でも感じ取っていただければと思います。アートクリエイターブロックの今と未来について語っていただきました。

より専門性の高いファンデーションが行われています

コミュニケーションアート、版画、平面　教授

西村正幸

―2008年から、これまで西村先生が中心となってアートクリエイターコースの運営をされてきました。今年度から絵画以外のコースがまとめられてアートクリエイターブロックとなりました。成果というと早計かもしれませんが、変化など感じられますか？

高校生の現状や学生の様子、話を聞いて必要なことを組み入れてアートクリエイターコースを作ってきました。もちろん想定したことと違うところもありますが、効果があったと実感しているところもあります。これまで、専門を選択してきた学生ではやらなかったことをやってみるということが大事なことだと考え、OHOC（4年間で100人の様々なクリエイターに出会い、卒業時には自分自身が101人目のクリエイターになるというプロジェクト）やいろんなプロジェクトに参加させるようにしています。そういった中で、良い影響を受けるような、一所懸命やっている学生を見て魅力的に感じ触発されるような動きが起きてきています。ファンデーションとプロジェクトの相乗効果かなと思います。

―プロジェクトには1年生から参加できるんですか？

そうです、1年生からプロジェクトに加えています。コミュニケーションアート専任の松岡君（松岡徹 教授）とも相談していたんですが、彫刻、陶芸・ガラス、美術文化、版画・平面、一緒に1つのブロックとして何かできることをやっていこうと考えています。全部のコースを一緒にするというところで、難しいかもという心配もありましたが、上級生が1年生をうまく使ってくれることを期待して参加させてみることにしました。いろんな体験をすることによって、個人の中で新しい発見があったり、自分には今までなかった新しいことを受け入れる感覚が養われていくと期待しています。

―学生の反応はいかがですか？

チュートリアル・コーチング制を導入して、学生と面談をやって確認しています。今年のことではないんですが、石彫の授業を受けた学生たち、女の子たちの反応がとても良かったことがありました。石彫のなかなか形になってこないところを、却って素材と格闘することを実感として受け取ったみたいで、体験して決めることの大事さを感じました。「やらせてみて見つけるということ」これは間違ってなかったなと感じています。

―すべての分野を体験するというと、広く浅く総花的になってしまうような気がしますが？

体験させることによってその人の専門を見つけ、専門の人たちを育てていき、専門分野を持った卒業生が、地域、福祉、医療、教育、いろんなところにいって自分の専門を役立たせるという順序なんですよね。そのためのファンデーションだと考えています。段階としては、ファンデーションで技術的なことを専門の先生に教えてもらって、我々がコーディネートして欠けている部分を補っていく。そうして2年、3年と4年とかかってチームを組んだり個人の専門を極めていくという図を描いています。以前のアートクリエイターよりも1年生が専門化されたので、より専門的なことができるかなと考えています。実際、キャンパス内で制作している彼らの光景ですが、デッサンの授業で屋外でイーゼルを持って描いている。洋画の授業でも今や屋外で描いていることはあまり見かけなくなりました。彫刻の授業でも粘土を付けて人体を作っています。彫刻を専門に取った学生しかやっていなかったことですが、今年は、ガチッとやってもらっています。オーソドックスだけど、今、一番足りないことを考えてカリキュラムに入れています。一番専門性がないと思われてるアートクリエイターの学生が、昔ながらの一番骨太なことをやっているように思います。現場の先生たちは、すばらしく情熱を持って専門的にやっています。そういったことも、外部にももっと広まってほしいですね。

―就職の話は少々気が早いかも知れませんが、アートクリエイターコースからは2期卒業生を送り出しています。どんな仕事に就いているんでしょうか？

だいたい8割が就職、2割が作家活動を行っています。デザインナー、カメラマン、美術の企画会社、ディレクター……、概ね望んでいた部分には行っているように思います。クリエイティブな仕事、あるいは教職員などになっています。いままでのアートクリエイターコースと違い、今年の学生からは、他のコースの学生とも交流を持ちやすくなります。一緒にファンデーションを受けた仲間ですからね。2年次以降の専門は5クラスありますが、コミュニケーションアートは、他のコースとは同列と考えていません。他の4つを結びつける核となる役割ができるクラスなのです。例えば美術文化クラスが全体のまとめ役としてプロジェクトを企画、プロデュースし、コミュニケーションアートがディレクター的な役割を担う。そうして必要な素材を提供できるそれぞれ専門のクラスがある。そんなチームが作っていけるようになって欲しいんです。そうした専門家が社会の中に入っていけば、世の中も少しずつでも変わっていくのではないかと思うんです。プロを育てていろんな現場に入っていく、頑張っていけばその現場が変わる。世の中も変わっていく。長い道のりですが、それが大きな目標ですね。

＜油彩実技＞

＜日本画実技＞

＜デッサン＞

作り上げていく力を養ってほしい

美術文化
教授
前田ちま子

「社会の中の美術と教育」を研究テーマに、東京青山「こどもの城」で16年間、子どもや親子、指導者のための展覧会やワークショップを多数企画実施。博物館教育、美術館教育、参加体験型展示（インタラクティブ・アプローチ）、ワークショップを専門に研究調査。

―前田先生のこれまでやってきたことを顧みると、美術文化なんですが随分実践的なことをやってこられたように思います。

そうですね。アートクリエイターコースには、美術文化関連は２種類あり、芸術編集は高橋綾子先生が、特に実践的な美術教育の普及を私が担当しています。実際に学生が美術館の現場に出て行って、ワークショップを実施しています。これまで、名古屋ボストン美術館、名古屋市美術館などでやらせていただいています。学生に対し個別に指導していくようなやり方で進んできました。その辺りは今年のファンデーションでも変わらず、学生が企画から始めてワークショップを実施するまで、プロセスを重視しながらやっています。現在進めているのは、愛知県児童総合センターでのワークショップです。

―愛知県児童総合センターとの連携のワークショップですか。

今回は、愛知県児童総合センターの方から大学と連携したいと声をかけていただきました。美術文化コースの２年生のグループとファンデーションの１年生だけのグループが参加します。初めてですが、アイデアも面白く、センターの方たちにとっても刺激になっていいと評価をいただき、まだ準備段階ですがスムーズに進んでいます。実際にワークショップを行うと、一般の来場者は、学生であってもスタッフとして接します。こうしたことを自分自身で体験すると、頭で思っていることと実際は違うということがよく分かります。作家というのは自分の思いで表現しますが、美術文化の領域では、子供であるとか来館者であるとか第３者がいます。そして、その人たちのために企画し実行します。テーマがあり、そのために計画して、組み立てて、どのような体験をしてもらうか、それらを考え作っていきます。独りよがりでやってしまうと全く違うことになってしまいます。ディスカッションしたり、グループワーク抜きでは、成立しないものですね。

―ワークショップを企画して行うことにより、どんなことが学べるのでしょうか？

ワークショップの意味が、じつは２重の意味になっていまして、学生は学外で実施するワークショップを組み立てているけど、この教室がすでにワークショップ空間になっているんです。学生たちもそれぞれバックグラウンドが違います。違うから無二で今しかありません。ワークショップというと通常、ものを作ったり講習会的なものになりがちですが、この授業で行われているワークショップは異なります。自分で独立してやっている個人が集まり、出会ったことで新しいことが生まれます。たとえ最初に提示する制作物が不十分であっても、みんなが共有しつつ、自分と人が協同する。そのことが重要だと思います。これは、私自身のコンセプトであり、ワークショップに対する変わらない考えでもあります。

―アートクリエイターブロックになり、制作に携わりたい学生も選択するようになりますか？

学生さんの気質として、構築していくことが好きな学生もいます。いろいろやっているなかで、そこに構築的なものも一本通しておいてあげないといけないなと感じています。しっかりと構築したものがあり、その中にその人なりのものが育つのだと思います。詰め込みじゃなく、自分の興味で調べたり能動的に考えることが、一番の学びになると思います。ファンデーションがあり、その次の専門に進んでも、自分が何に興味があるのか、一生積み上げられることを見つけることが大切で、そのために大学があります。糸口はどこかにあるはずで、４年間のうちに見つけられるようにして欲しいです。大学を卒業すれば、否が応でも自分で考えていかなきゃならなくなります。そのために練習できるチャンスが今です。社会に出ても、人を受け入れたり考えを共有して、新しい環境や何もないところからでも何かを作り上げていく力を養ってほしいですね。

美文演習＜歩く人制作＞
彫刻の好きな学生がロダン作《歩く人》を取り上げ、説明している間に他の学生は耳からの情報でイメージした形を、練り消しゴムで制作中。作品解説を聴きながら想像したものを組み立て、「描く・つくる」実習のひとつ。見ているようで見ていないことは意外と多い。ここでは「聴く」ことで「見る」ことにさらに気づくことに焦点をあてた課題。第三者に話すことで「ものをよく見るようになり」、また聴くことで「他の人が“見た”モノを形としてあらわす」という、両者にとって五感の覚醒となる。

美文演習
＜視覚の遮断＞
目隠し、視覚以外の感覚で感じることを体験する。五感で感じたことを“見る”ということに反映させ、美術文化を根源的な部分で見てみることを体験する。“見る”ということに積極的に関わり、五感で感じることがアートの始まりだということを再確認する。

美文演習＜ワークショップ企画＞
愛知県児童総合センターとの連携ワークショップ「ちずであそぶ」。企画から学生が関わり、アイデアを出し、準備、ワークショップの実演まで行う。センターの職員は美術文化の卒業生 松村淳子さん。

「ちずであそぶ」より
「球体地図」
5つの球体に、地球、宇宙、砂漠、ジャングル、未来をイメージし、さまざまなものを貼り付け、空想の世界を作る。

「ちずであそぶ」より
「けっかんをなぞってみよう」
血管は、体のすみずみまで栄養を運ぶ体内の「道」。血管をペンでなぞることで見えるようにし、自分の体の中にある地図を浮かび上がらせる。身体の不思議を体感。

美文演習＜最終発表＞
興味をもった名画を選択し、学生自身がそれをどのように見て感じたかを動画制作する。第三者に伝えることで「見る」ことを意識化する課題。最後に工夫点などを発表。

とにかく関わっていくしかないですね

コミュニケーションアート
教授
松岡徹

本学美術学部絵画科版画コース卒業、同研究生修了のOB。在学中から平面作品と同時に立体作品も手がけ、絵画、版画、写真、彫刻など、多彩な手法を使い国内外で多くの作品を発表している。

―松岡先生は、ご自身が学生時代に洋画から版画に転科しています。大きく変化はありましたか？

僕の頃は、版画コースができたばかりで、何でも自由にできる雰囲気がありました。本当は、カテゴリ分けというものはどうでも良くて、指導してくれる先生がどういう立ち位置で、どうやって学生を指導するか、この問題が大きいと思います。コース分けも本当はいらないというと語弊がありますが、そんなにきめ細かく分けなくてもいいのではないかと思うことがあります。一人ひとり、興味もやりたいことも違うことだし、個人によって作り方もできあがりも異なります。結局１人１コース、というか、各個人に同じ指導を行うよりも、その人がどう考えていて、どういうことがその時点で一番ためになるか、一緒に考えることが必要ではないかと考えています。僕自身、学生時代にそうしてもらったことで成長できたと思います。

―やりたいことがいくつもあるというのは良いことだと思いますが、あちこち手を出すだけで、自分が何をやりたいのか判らないまま終わってしまうことは？

その危険性がいつもあるので、まずは、学生が一所懸命作るという状況になってくれるように努めています。没頭してくれるように、面白くなるように努力しています。そこがスタートなんですね。あとはちょっとずつ、いいタイミングでアドバイスできればいいのかなと思っています。大学の４年間は、ぼやぼやしていると、すぐに終わってしまいます。やる気を引き出す。次に、期限を決めて自分のやりたいこと、将来についてのアドバイスをしています。これまでのアートクリエイターコースの学生のなかにも、なかなか専門を決められない人がいます。「あなたはここがいい」と、こちらが断言していいものか、ケースバイケースでとても判断が難しいですが、チュートリアル、コーチングを頻繁にやって学生と対話していくしかありません。

―これまで、自分の思っていたことと選択したコースが、変わっていく学生はいますか？

もちろんあります。授業を受けているうちに興味が出てきて、変わっていくことはよくあります。僕個人は、やる気があればどのコースに行ってもいいと思っています。悩んだまま続けるより、移ってやる気になれるなら、移れば良いと思います。例えばアートクリエイターブロックになってから、彫刻に行きたいという学生が増えました。最近の学生たちの中には、彫刻に行っても就職できないとか、そんな風に考えている感じがあります。でもアートクリエイターブロックになり、考える時間もあるしほかのことを学ぶこともできます。彫刻をやりたいと迷っていた学生が入りやすくなったのかなという気がします。ただ彫刻そのものは、世の中でとても役立つ技術なんです。そのことがもっと上手く学生たちに伝われればなぁと思います。

―アートクリエイターブロックの目標といいますか、どんな人が育って欲しいですか？

例えば作家として、ただ自分らしい作品を作ればいいだけではなく、いかに社会に役立つかを意識して欲しいですね。現在、アートクリエイターブロックでは産学官、様々な連携事業をやっています。自分の持っている美術の力をどんな風に使っていくか、美術の力を社会に役立てられるかを考え、役に立って欲しいと思っています。僕個人の考えなので、あまり押しつけになってはいけないですが、社会に必要にされるような美術の仕事を見つけて欲しいです。ともすれば作家やクリエイターというのは独りよがりになったり、自分との戦いに終始しがちです。でもそれだけでなく、社会とのつながりをしっかり持ち、求められたときに自分の持っている力を社会に活かせる人になって欲しいと思います。

コミュニケーションアート実技
<クリエイター研究>
絵画、彫刻、グラフィックデザインの概要を説明し、一つのテーマを上記の３つのカテゴリーごとに展開して体験する授業。

◀アルミホイルを使って、自分が表現したい情景を立体で表現し、第三者が想像して解説する課題。

グループごとに、与えられたテーマを即興で瞬間パフォーマンスする課題。▶

<彫刻実技>

<陶芸実技>

<ガラス実技>

Close up!
進化する「名古屋芸大」のDNA
NUA-ism

宮本益光バリトンリサイタル『碧のイタリア歌曲』2013年7月

「宮本益光さんとは起業したての頃、少しだけ仕事でご一緒したことがあるのですが、私は、彼の音楽家としての仕事ぶりを見て衝撃を受けました。自分自身の考え方はいかにも甘くて、何も出来ていないということに気づかされました。宮本さんは、私が一流になりたいと思ったきっかけを与えてくれた人です。こういう人と一緒に仕事ができるようになり幸せです。」

心理学の勉強をして資格も取りました。精神的にデリケートな人もいますので、音楽に集中できるように何とかお手伝いできるように・・・・・・

自分にできることを

JR名古屋高島屋『2013 タカシマヤバレンタインランド』音楽プロデューサーとして、CM制作、及び会場BGMを担当

あいちトリエンナーレ2013祝祭ウィーク事業『アートインワンダーランド「リ・アリス」』

一度、社会に出ると大学のありがたさを痛感しますね。

のぶちまん

Vol.53
NUA-OG
佐々木伸枝
（ささき　のぶえ）
Music Office Nobuchi 代表

岐阜県生まれ
2009年　音楽学部音楽文化応用学科音楽ビジネスコース卒業
2005年　大学在学中に、Music Office Nobuchiを設立

マジックとダンスを融合させた新しいエンターテイメント『TORICK　ACT（トリックアクト）』2012年11月

オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』2013年8月・9月

『ワインセラーdeコンサート　マリコとロベルトの音楽の世界へようこそ!』2013年7月

自分のニックネーム“ノブチ”を社名にしたアーティストマネジメント会社を起業したのは本学在学中。目的が明確で、しかも、環境に恵まれて……、と思うかもしれない。でも、お話を伺うと、決して恵まれていたわけではないことが、むしろ大きな苦労を背負ってきた人だったのだと解った。「起業は学生時代だったんですけど、根拠のない自信と勢いだけですよ。当時は、できると思い込んでて、失敗するハズがないと思えたんです。『できない』なんて言われると、逆に『やってやる！』っていう勢いだけですよ」　“根拠のない自信”だったいうが、このときにはすでに大きな苦難を経験していた。

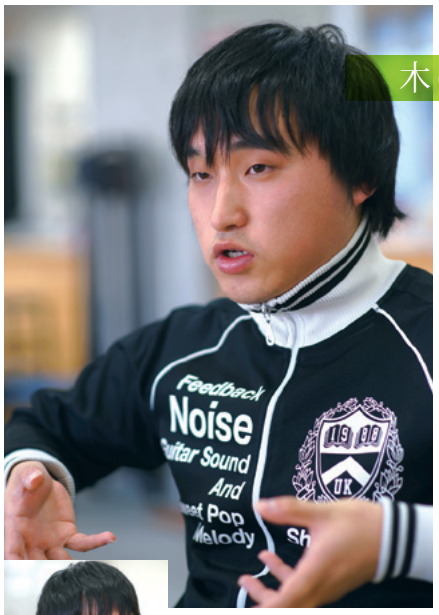
音楽マネジメントの道に進む以前は、演奏家を目指していた。中学で吹奏楽部に入りクラリネットと出会い、演奏家の道を志した。とりわけ音楽に理解のある家庭でもなければ裕福というわけでもなく、楽器を買ってもらうことも容易ではなかった。それでも、そんな環境が、却って音楽への気持ちを強くしたのかもしれない。吹奏楽の大会に出場し認められ、高校への推薦も複数の学校が候補に挙がった。しかし、道は平坦ではなかった。自宅から通える高校しか許されず、地元の商業高校へ進学した。吹奏楽部が盛んな学校で、いっそうクラリネットへ励むつもりでいた。しかし、思わぬことが起こり、願いは閉ざされる。入学して1年になる頃、10万人に一人といわれる難病に侵されてしまう。左半身がしびれ、クラリネットを手にすることはおろか、歩くこともできず、目すらぼやけて見えにくくなってしまった。音楽からは離れざるを得なかった。部活は休部、学校は、卒業さえできればいい…、高校生活は暗転した。

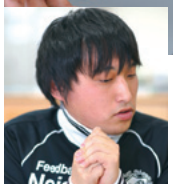
音楽の道はあきらめた。やりたかったことを捨て将来を憂いた。そんなとき、音楽ビジネスのことを知った。「まだ自分でも音楽にかかわることができる。本意ではなかった商業科だったけど、意味があったんだ！」　パッと目の前が開けた思いだったという。高校在学中に取得した会計1級とパソコンのスキルは、現在の自分に大きなものとなったという。

●●●

大学に入ってからも決して順風満帆だったわけではない。事情があり、4年生を前に休学することになってしまう。1年間休学し自分で働いて学費を貯めることにした。簿記やパソコンのスキルが認められ、ある銀行の法人部へ契約社員として採用された。「そこで、ビジネスの基礎を鍛えていただきましたね」初の社会人経験の場が、銀行の法人部。通常なら、ビジネス経験豊富な人材が担当する厳しい世界である。「周りは、年齢もそうですけど、キャリアもすごい人ばかり。自分は、何もできないので毎日ドキドキでしたよ。毎日、本当に泣きそうでした」　それでも、自分にできることを精一杯やるしかないと、電話が鳴れば一番に取り、仕事場を掃除してと、文字通りできることに専心した。こうした働きが放っておかれるはずがない。ビジネスマナーに始まり、仕事の多くのことを周りの先輩が教えてくれるようになった。何もできなかった自分のことを、たくさんの人が気にかけてくれて育ててくれたという。この時は、すでに起業していたこともあり、平日4日間は銀行の仕事、残りの3日は自分の仕事に充てていた。そして、銀行の仕事を覚えて行くにつれ、違和感も大きくなっていった。「土日に自分のことをやって、月曜日に会社のデスクに座ると『自分のやりたいことは、これとは違う』と感じるんです」　自分の仕事について客観的に判断できるように進歩したということなのだろう。1年間の社会人経験は“仕事”というものについて思い直すことにもつながっていた。

大学に復学してからは、とにかく勉強に励んだ。“1番になって卒業しよう”と強く思うようになっていた。学生のころには何とも思っていなかったことが、とても大事なことだったと気付かされたともいう。「失敗やトラブルはたくさんありましたが、そうした経験が自分を作ってくれたのかなと、今は思いますね」困難を乗り越えてきた強さと目標に対する一途さが、そばにいるだけで元気を分けてもらえるような心地よさを作り出しているのだろう。多くの演奏家が助けられてきたに違いあるまい。「演奏家が演奏に専念できるように、演奏以外の周りのことはすべて任せて下さい」　自信と誇りの満ちた言葉が頼もしい。





Vol.54
NUA-Graduate student

大倉悠揮
（おおくら　ゆうき）
大学院デザイン研究科
ライフスタイルデザイン研究2年

Find us on Facebook

木の面白さを伝えたい

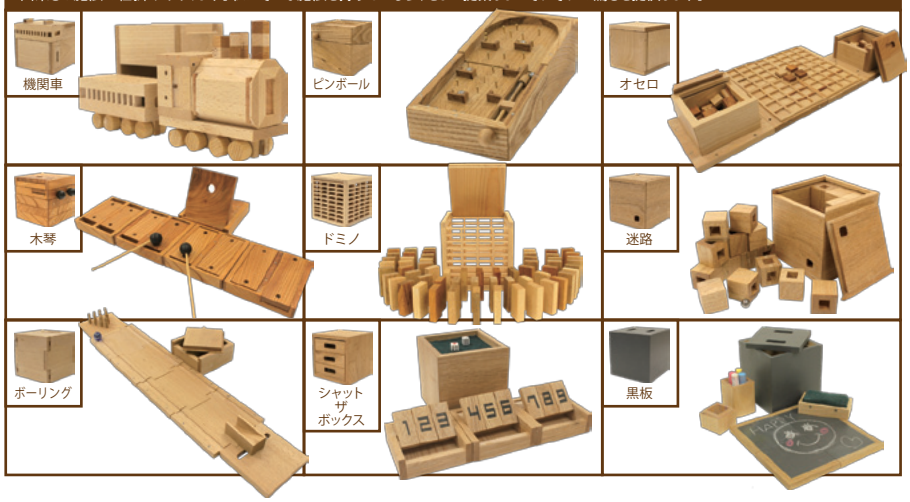
遊木 ユウキ

100×100×100mm
2012年度
名古屋芸術大学
卒業制作

卒業テーマは、木のおもしろさを再発見することができる作品作り。木の面白さを伝える方法は、デザインやカタチだけではないはずと、試行錯誤しています。
ライフスタイルデザインは、ものを考えることがメイン。ものづくりにこだわる自分は、ライフスタイルデザインでは初めてのタイプじゃないかと言われているようです。
ものを作ることは、インダストリアルデザインやスペースデザインなどそのコースでもできます。
ライフスタイルは考えることが身につくので、それが自分にはよかったかなと思います。

丹波の森 ウッドクラフト展 木のおもちゃ大賞 新人賞

おもちゃってなんだろう?積み木、人形いろんな種類のおもちゃがあり、みんな自分の姿をドンと出して人を引きつけます。私が提案するのはそんな「おもちゃの形」が隠れるおもちゃであります。隠すのになんのメリットがあるの?そう思った人もいるでしょう。隠す事は人を「あっ!?」と驚かせる事が出来きる魔法の仕掛けであります。私はそんな魔法を持ったおもちゃを9つ提案し9つそれぞれの驚きを提供します。



– 丁寧な作りが印象的な木のおもちゃ。木にこだわりが？

じつは祖父が大工をやってたんですが、子供の頃から身近にあったからなんでしょうかね。木の匂いが好きで、木の違いによって匂いも違いますよね。木によって、堅いもの、柔らかいものがあり、触る感覚も好きだし、お椀や箸、食器なんかだと口で含むから味覚にも来ます。五感で楽しめる、それが面白いなって思います。

– ずっと木を触ってきたんだ

そんなことはなくて、大学に入ったときはゲームが好きだったので、最初は木工とは全く関係なくプログラミングの方でゲームを作ってみんなに遊んでもらっていました。その頃は自分の作品のテーマを思いつかなかったんです。1年生の終わりの頃、フィリップ・ブース先生（2002〜2010デザイン学部教授）の手伝いをやったときに木の魅力に気が付いて、2年の授業でもブース先生に木を勧められたことがあって、それ以来、いろんな課題があるんですけども必ず決まって木を使うようになっていたんです。それで、木の遊びというか、おもちゃがテーマになっていきました。院生になってからは、いかに木の面白さを世の中に伝えられるかということを考えて作るようになりました。試行錯誤しながら、おもちゃだけでなくテーブルや椅子、スツールなど、家具にも今は取り組んでいます。

– おもちゃを習作で作るようなことはあっても、メインにすることはめずらしいんじゃないですか？

そうですね。おもちゃっていうジャンルは、職人さんが定年退職したり、建築関係のデザイナーなんかが、本来の仕事とは離れたところで発表していることが多くて、若手の人がおもちゃから入るというのはめずらしいと思いますね。おもちゃは、わかりやすいじゃないですか。自分の作ったもので周りに喜んでもらうこと、作品を楽しんでもらうことが大事だと思っているんです。ゲームを作っていた頃から変わってないかもしれないですね。

– 自分の作品の特徴はどんなところだと思いますか？

特徴というほどのことはまだないんですけど、自分のスタンスとして、作ったものを実際に使ってもらってそれを観察して次の作品に活かしていくということをやっています。あるおもちゃ会社の社長さんからヒントをいただいたんですけど、会社が公園のすぐ目の前にあって、そこで遊んでいる子供たちを観察して商品作りに役立てているんですよ。それで、僕も東京おもちゃ美術館へ行って、親御さんの許可をいただいて子供たちを観察したりしました。子供たちの行動をじかに見て、作品に取り入れるようにしています。

– 子供の観察に限らず、全国いろんな会社や美術館へ見に行っているようですね

院生になってから、日本各地の職人さんのところにいって、いろんな話を聞くことができました。今は職人さんに近いところを追いかけている感じですね。職人さんは、作家やデザイナーと違って技術第一優先で、技術を磨くために一所懸命やっています。その技術に少しでも近づきたいですね。

– 将来は？

うーん、そうですね。今のところは、木工所とか会社に入って、木のことをもっと勉強したいですね。基盤を作った後に、独立して木の面白さを伝える活動ができれば理想です。

大倉さんに聞きました。

大学は忙しい?

恵まれた環境をフル活用で木と向き合う毎日!

05:00 起床
体調管理のため、ランニングを日課にしています。

05:30 支度

08:00 出発
通学は車で、50分程。

9:00 大学到着
作業にとりかかる前に、いろいろ雑事をかたづけます。

名古屋芸大の木工房は、日本でも5本の指に入るくらいの設備。使わないと宝の持ち腐れなんですよ。
1年の終わり頃から工房に入り浸って、工房の手伝いをやってます。

10:00 木工房へ
工房は10時に開きます。

00:00 昼食
制作期間中だと、夕方まで工房で作業。

工房には課題で学生が来るので、手伝ってますね。技術員一人だと間に合わないので、簡単なことならちょっと教えたりしてます。今の僕にとっては技術員の方が一番の先生です。

17:00
図面を書いたり、先生や友達と話をしたり。

20:00 大学出発

22:00 帰宅
大学卒業時に下宿を引き払ったのですが、今の方が大学にいる時間が長いくらいで…。

24:00 就寝
師匠の言いつけを守り、今日の事を明日に持ち越さないようにしています。

News & Topics ニュース&トピックス

大学総合

芸大祭とミニオープンキャンパスが行われました

本学の秋の恒例行事「芸大祭」が、2013年10月26日(土)、27日(日)の2日にわたり開催されました。本学の学園祭であるこの芸大祭は、学生たちにとっての一大イベントです。今回も東西両キャンパスが協力し、地域の方々との触れ合いや交流の場として芸大祭を運営しました。

2013年の芸大祭のテーマは、東キャンパスが『JAMBOREE』、西キャンパスは『エコーズ』を掲げ、それぞれのテーマに沿ったステージイベントや多彩な模擬店などで大いに盛り上がりました。

音楽学部と人間発達学部の東キャンパスでは、野外ステージをはじめ、キャンパス内に5カ所の特設ステージを設け、クラシックからロックまで、多彩な演奏が繰り広げられました。また、子どもたちが参加して楽しむことができる巨大スゴロクやお絵描き部屋、フェイスペイントなども行なわれ、小さなお子さんと一緒に来場された親子連れなどにとても好評を博しました。

一方、美術学部とデザイン学部の西キャンパスでは、外来イベントの「コラージュ」が話題に。ゲストにはクラブカルチャーとシンクロしたライブペイントを披露する「ina takayuki」のをはじめ、映像とパフォーマンスを融合したエンターテーメント集団「enra」、萌えやロリータなど二次元美少女をモチーフに描くライブペイントの「愛☆まどんな」などが登場。さまざまなジャンルのアーティストを通じてアートに触れる機会となりました。

また、2日目の27日には、東西両キャンパスでミニオープンキャンパスも開催されました。会場には各学部の相談コーナーが設けられ、多数の高校生が参加していました。さらに、音楽学部では、ピアノやフルートなどの指導会「ワンポイントレッスン」も開催。ミニオープンキャンパスに来場した高校生たちは、模擬店などを通じ、学生や教員と楽しく交流する場面も多く見受けられました。参加者からは、普段のオープンキャンパスでは見ることができない名古屋芸術大学の素顔を見ることができたと評価を受けました。

【東キャンパス】
1 1号館の巨大スゴロクはちびっこたちに大人気
2 メインステージのライブ演奏
3 ミュージカル公開リハーサル
4 ワンポイントレッスンの様子

【西キャンパス】
5 洋画ライブペイント
6 趣向をこらしたユニークな模擬店が並ぶ
7 日本画作品展
8 デザイン学部ミニオープンキャンパス相談コーナー

大学総合

第24回 生涯学習大学公開講座を開講

本学の第24回生涯学習大学公開講座が、2013年9月から12月まで東西両キャンパスで開講されました。今年度も、参加者の皆様よりご要望のあった講座などを新たに加え、各学部の専門分野を活かした33講座が開設されました。

両キャンパスで開講された講座の中から一部をご紹介します。

東キャンパス

◆ラテンのリズムで楽しく演奏『Cajonカホン』

カホンとはスペイン語で「箱」という意味。ラテン音楽には欠かせない打楽器です。楽譜が無くてもすぐに演奏でき、音色は様々。どんなジャンルの音楽にも合わせられるとても素敵な楽器です。カホンを使ってラテン音楽を味わってみましょう。本講座は楽器を作るところから始めます。

講師：ルベン・フィゲロア
（本学音楽学部非常勤講師）
曜日・時間：火曜日18：15－19：45
講座数：全10回
受講料：18,000円
（教材費5,000円含む）

◆初心者歓迎！楽譜を解読して楽にピアノを弾くコツをお教えします！

楽譜というのは作曲家からの手紙です。それを読み解けばとても楽にピアノを演奏することができます。読み解くのに役立つ簡単なコツをお教えします。初心者の方も大丈夫です。

講師：山田　亮
（本学音楽学部非常勤講師）
曜日・時間：金曜日10：40－12：40
講座数：全7回
受講料：7,800円

◆子育てのあり方を、モンテッソーリ教育からも学んでみる

第1講：モンテッソーリ教育の理念について講義と保育実践DVD。
第2講：日常生活練習用具を使ってみる。
第3講：感覚教具を使ってみる。
第4講：算数教具を使ってみる。
第5講：言語教具を使ってみる。
第6講：文化教具を使ってみる。

講師：野原由利子
（本学人間発達学部教授）
曜日・時間：金曜日10：00－12：00
講座数：全6回
受講料：8,850円
（教材費1,050円含む）

西キャンパス

◆体験～美しい色彩のリトグラフ講座

「リトグラフ」とは、水と油の反発を利用して、水彩やペンで描いたような版画のことです。色と色、版と版を重ねて魅せる、カラフルなリトグラフで小作品を作りましょう。リトグラフは特別な設備が必要なため、充実した大学の設備を利用して版画製作をします。

講師：加藤美奈子
（本学美術学部非常勤講師）
曜日・時間：木曜日18：00－20：00
講座数：全8回
受講料：13,400円
（教材費3,000円含む）

◆粘土による造形～テラコッタ～

“粘土による自由な造形”を軸に、裸婦モデルを用いての制作や抽象的な立体作品など、粘度による造形を、手が動くままに楽しみながら制作します。その作品をガスまたは電気窯により焼成します。

講師：竹屋　修
（本学美術学部非常勤講師）
曜日・時間：木曜日10：00－12：00
講座数：全9回
受講料：16,400円
（焼成代、教材費4,700円含む）

◆楽しいピンポン（卓球）

①楽なグリップのコツ、②楽なフォームのコツ、③楽な動きのコツ、④楽しいラリーのコツ、⑤簡単なルールのコツ、⑥楽しいゲームのコツ。この6項目を活かして「楽に楽しく卓球できるコツ」を教えます。⑦ゲーム（サーブのコツ）、⑧ゲーム（レシーブのコツ）、⑨ゲーム（繋げる3・4球とは）、⑩ゲーム（繋がるゲーム運びとは）。ゲームは組み立てるもの、この4項目でゲームの組み立て方をお伝えします。

講師：今村博文
（本学元職員、日本体育協会卓球上級指導員）
曜日・時間：木曜日18：00－19：30
講座数：全10回
受講料：14,800円
（卓球ボール代1,800円含む）

音楽学部

名古屋芸術大学 フルートオーケストラのスペイン演奏旅行が行われました

本学フルートオーケストラ（41名）は、2013年7月16日～26日の日程でスペインの2都市で演奏旅行を行ってきました。

この演奏旅行は竹内雅一教授のかねてからの知人で、ベルギー、アントワープ音楽院のヤン・ギュンス教授の要請によるものでした。

演奏会の一回目はヴァレンシアで127年の伝統のある国際吹奏楽コンクール委員会から招待を受けて行われました。

演奏会場の「PALAU DE LA MUSICA」は響きがとても素晴らしく、同行の竹内、依田両先生も感心されていました。

演奏会はスタンディングオベーションで終えることができ、ヤン・ギュンス教授、国際吹奏楽コンクール委員長からも絶賛して頂きました。

二回目の演奏会はバルセロナ近郊のリゾート地、ヴェンドレルのAUDITOR PAU CASALS」で行われ、カザルス音楽祭参加の演奏会でした。

ホールは（故）パブロ・カザルスが三年間を過ごした家（現在はカザルス博物館）の前に建っており、木造でこじんまりしていますが、とてもアコースティックな響きで、ソロ･室内楽等のレコーディングも行われる、とても良い雰囲気のホールでした。

演奏会は市長、カザルス音楽祭関係者、そして、バルセロナ日本国総領事館の主席領事も来場するなか始まり、ヴァレンシア同様鳴り止まない拍手を受け、成功裏に無事に終える事ができました。

この演奏旅行で得たものはとても多く、参加した卒業生、学生諸君のこれからの音楽人生に大きな自信となり活かされることと思います。

尚、今回の演奏曲目は、モーツァルト、「フィガロの結婚」序曲。ファリャ、「恋は魔術師」。広瀬量平、「ブルーとレイン」。武野晴久、「A Way t。the East」（世界初演）。ビゼー、「カルメン」組曲。グリーグ、「ホルベルグ組曲」。アンコールに「八木節」でした。

1 オーケストラメンバーの集合写真（中央左：高木教授、右：バルセロナ日本国総領事館主席領事）
2 ヴェンドレルの「AUDITOR PAU CASALS」演奏会場
3 祭りの法被を着て演奏しているメンバーたち
4 「PALAU DE LA MUSICA」の前に集合したフルートオーケストラのメンバー

音楽学部

あいちトリエンナーレ2013「祝祭ウィーク」舞台公演「ショービジネスに乾杯!」が上演されました

2013年10月3日㈭、愛知県芸術劇場大ホールにて、あいちトリエンナーレ2013祝祭ウィークの舞台公演の一つとして、本学のミュージカル公演「ショービジネスに乾杯！」が上演されました。

あいちトリエンナーレ2013では、9月30日㈪から10月6日㈰まで7日間の祝祭ウィークが設けられ、事前の審査で選ばれた地元の文化芸術団体との共催で舞台公演が実施されました。優れた活動実績を誇り、活発に文化芸術活動を展開する14の団体・個人が、舞踊・音楽・ミュージカルなど多彩なジャンルの演目を披露し、トリエンナーレを盛り上げました。本学のミュージカル公演「ショービジネスに乾杯！」はこの中の一つとして上演されたものです。

今回のミュージカル「ショービジネスに乾杯！」は、本場ニューヨークのブロードウェイで上演（予定）されているミュージカル作品のハイライトを、ショー形式に再構成したものです。

構成・演出は、劇作家・演出家で本学ミュージカルコース教授の森泉博行が、音楽監督と指揮は本学演奏学科教授の竹内雅一が執りました。演奏は名古屋芸術大学ウィンドオーケストラ（学部生・大学院生・研究生等で構成）と、卒業生の演奏グループGoran-aleの協奏で行われました。

キャストは、名古屋芸術大学ミュージカル・ワン（本学ミュージカルコースの卒業生・在学生で構成されたミュージカル劇団）を中心として、ミュージカルコースの学生や声楽コースの学生たちで、また、本学と連携協定を結んでいる高山市の飛騨ミュージカルカンパニーと刈谷市の刈谷市民ミュージカルも出演しました。

プログラムは、アメリカの古き良き時代を描いた「CHICAGO」でスタート。華やかなストーリーとダイナミックなダンスが人気のミュージカルです。続いて、「JISUS CHRIST SUPERSTAR」で、聖書を題材にイエス・キリストの最後の7日間を描いた音楽と歌曲のみで物語が進行するロックミュージカル。そして、かの有名な「Les Miserables」。ヴィクトル・ユーゴーの同名小説を原作に、世界43カ国で上演されて大ヒットを記録した名作でした。

後半は、「Wicked」。境遇の全く異なる魔女2人の友情や三角関係に焦点を当てながら、アメリカ社会が抱える弱者への差別問題を描いている作品でした。そして、個性的な猫たちが都会のゴミ捨て場を舞台に踊りと歌を繰り広げる「CATS」。オペラ座の怪人に次いでブロードウェイでロングラン公演記録を持つミュージカルでした。最後は「HAIR」で、ロングヘアーが自由のシンボルとなっていた1960年代、ヒッピー達の交流を題材に愛・平和・自由を探し求める若者たちの群像を描いた作品です。斬新な演出で話題となりブロードウェイに革命を起こしたミュージカルでした。

以上、ブロードウェイで上演（予定）されている6作品のハイライトシーンがショー形式で上演されました。

ウェインドオーケストラの生演奏とキャストの華麗な歌声やダイナミックなダンス・パフォーマンスが繰り広げられる見ごたえのあるミュージカルとなりました。オールキャストが勢揃いしたラストシーンでは、芸術劇場大ホールを埋めた1,350人の来場者から盛大な拍手が送られていました。

人間発達学部

2013年度 子育ち・子育てワークショップ「にこにこワークショップ」が開催されました

2013年度後期の子育ち・子育てワークショップ「にこにこワークショップ」が、2013年10月3日から2014年1月16日まで、本学東キャンパス11号館1階の子どもコミュニティーセンターで、全21回にわたって開催されました。

内容は「自由な遊び」と「テーマ遊び」で、親子で来室後、自由な遊びを楽しんでいただき、場所や雰囲気に慣れたころ、手遊び、絵本紙芝居や「テーマ遊び」が行われました。色々な遊びを通して、楽しさを親子や友達と共有できるように工夫されていました。

また、保護者を対象に、大学の教員が専門を活かした子育ち・子育てについての「ミニミニ講座」や個別相談も開催されました。さらに、世代間交流として地域で活動されている方とのふれあいや、秋の大学祭には学生主催のワークショップも行われました。

10月から11月初旬にかけて、外遊びが気持ちよい季節には、砂場や学内の芝生で元気に駆け回って遊ぶ子どもたちと、それを優しい眼差しで見つめる母親の姿が見られました。

美術学部

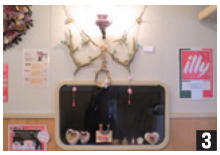
あいちトリエンナーレ2013 パートナーシップ事業「まちかど芸術祭」が行われました

2013年10月5日㈯から10月27日㈰まで、あいちトリエンナーレ2013パートナーシップ事業の一つとして、名古屋市西区の四間道及び円頓寺商店街・円頓寺本町商店街で、まちかど芸術祭が開催されました。

この芸術祭は、商店街の店舗のショーウィンドにアート作品を常設展示するもので、本学美術学部版画コース・アートクリエイターコースの学生と、一部の教員の作品が展示されました。

四間道は西区の堀川沿いにある那古野の町を南北に通る歴史的な道で、名古屋城の南西1Kmのところにあります。奇跡的にも第二次世界大戦の戦火を免れ、戦後は名古屋の市街地開発に見舞われながらも、未だに古い街並みをとどめており、名古屋市の街並み保存地区に指定されています。白壁の土蔵が連なり、長屋の2階には屋根神様が祀られていて、すぐ近くの円頓寺商店街とともにレトロな雰囲気を醸し出しています。

この四間道・円頓寺のレトロな街並みにプロの芸術家をめざす卵たちのアート作品が数多く展示されました。10月5日のオープニングイベントでは、ペットボトルを持ち寄ってアートオブジェを作るワークショップや、クリエイターが集まってオリジナル作品を販売するフリーマーケットやアート体験コーナー、音楽、パフォーマンスが集合するライブステージなども行われました。



1 野田仙（ぞうり・履物専門店）に展示された伊藤沙織さんの作品
2 菓舗 糸びすやに展示された迫田有花子さんの作品
3 Mammys coffeeに展示された権田実咲さんの作品
4 本町エリアのアサヒ写真株式会社に展示された土屋志織さんの作品
5 白壁の土蔵が連なる四間道の街並み
6 円頓寺商店街のアーケード

商店街の馴染みの店に、絵画や版画・彫刻・オブジェなど、普段は見慣れないアート作品が展示されていて、買い物に訪れたお客も眼を留め、店主から説明を受けたりして楽しんでいました。どの店舗にどんな作品が展示してあるかは、「みて歩きアートマップ」に表記されていて、各店舗で配布されていました。

美術学部

美術学部特別客員教授 日野原重明氏による特別講演会が開催されました

2013年12月5日㈭、本学西キャンパスB棟大講義室で、美術学部特別客員教授の日野原重明氏による特別講演会が開催されました。

聖路加国際メディカルセンター理事長で、聖路加国際病院名誉会長を務められる日野原氏の講演会とあって、本学の学生をはじめ、多くの一般の方々から聴講の希望をいただきました。予想を上回る応募数に、スクリーン映像で聴講できる別室を2カ所用意しました。講演会に先立ち、学長の竹本義明が来場者の皆さまに謝辞を述べ、続いて、美術学部長の神戸峰男が日野原氏の経歴などを紹介させていただきました。

先日102歳を迎えられたばかりという日野原氏は、来場者のカメラに対してお茶目なポーズをとるなど、サービス精神も旺盛で気さくなお人柄が伺えます。そして何よりもエネルギッシュな佇まいがとても印象的です。登壇された日野原氏は、テーマ『アートと医療』について次のように前置きをし、講義をスタートされました。

「私は74年間内科医を務め、その間にさまざまな仕事や研究をしてきました。この長い生涯で学んだことの中でも“医学だけでは癒しの技は困難である”ということが、私にとって大きなテーマなのです。これは、医者がいれさえすればすべてが解決するわけではないということです。病を癒すということは、医学、医者以外の癒しの技が働かないと実現されないという事実があります。医学がまだ発達していない未文化な時代も、多くの人が病気にかかり、医者がいなくても、ある程度癒しが適えられたということを、これからご説明したいと思います。これらの説明から、私の考えるアートと医療についてご理解いただけることを望んでいます。」

最初に日野原氏は、古代ギリシャの医者ヒポクラテスの有名な言葉“Art is long, life is short”を紹介されました。これを『人生は短いが、医療を習得するのに必要な年月は果てしなく長い』と訳され、「このヒポクラテスの言葉にもあるように、紀元前には、アート（術）とういう言葉は“癒しの技”という意味で使われていました。」と説明されました。そして、古代から現代へと医療の変遷の中で、アート（術）とサイエンス（科学）の関係について解説を加えられました。

「古代にはサイエンスなど無く、癒しの術＝アートがあり、その当時は病む人が医療の対象でした。その病んでいる人への暖かなケアを行い、命の質が高くなることを望みました。それが、医学が進み近世にいたると、サイエンスは頭でっかちになり、対象も病む人から病気や疾患自体となり、治療効果を目指すように変化しました。それは、冷たい治療でもあり、寿命が長くなるという目的さえ達成されればよいという方向に、長い歴史の中で変遷してきました。」と述べられました。

現在、医療の領域は広がりをみせています。自然科学や心理学、人文科学、さらには倫理学や哲学、宗教までを医学が目指す範疇として捉えられています。今日の医学教育の基礎を築いたカナダの医学者ウィリアム・オスラー（1849-1919）によれば、“医学はサイエンスに基礎をおくアートである”と説か

れています。医学の目標はサイエンスで終わるのではなく、幅広いアートにサイエンスの基礎を置かなければならないのです。

そのためにもアートを学ぶ必要があるとする日野原氏は「アートの大義は理論に習熟すること。そして、実践においても習熟することです。そして、一番の目的は幅の広いアートに習熟することにより、その上で何をすべきか！ ということなのです。」と伝えました。

続けて「話は飛躍しますが、皆さんは体と心と魂を持っています。その心をどのように耕せばいいのか。その具体例として臨済宗妙心寺派長福寺の上沼雅龍（かみぬまがりょう）住職の教え“こころの耕耘機”が実に分かりやすい。心を耕すということ、それは“狭い田んぼを深く耕せ”です。さらに、京都大学哲学科の西谷教授は“自分の心を耕すことが自己形成である”とおっしゃっています。」と解説されました。

ここで日野原氏は「耕」の漢字の成り立ちを解説されました。部首の「耒」は鋤（すき）のこと。「井」は形（型）の原型で四角い枠の意味です。その二つの文字を組み合せた「耕」は、鋤で畑地に縦横の筋を入れ、四角く区切ること。こういった準備をするからこそ耕すことができるのです。また英語では「耕す」は“cultivate”と書きます。これはラテン語の“colere”に由来し、はじめは土地を耕す意味で用いられましたが、英語に入り、心を耕すことの意味で用いられるようになりました。そこから教養、文化を意味する“culture”として使われるようになりました。耕すことは文化と同義だと言えるのです。

「耕すといえば、ジャン＝フランソワ・ミレー（1814-1875）の『耕す人』が有名ですね。この絵のように、努力して自分の心を耕さなければ実りは得られない。だからこそ、皆さんは自分の心を耕すために何が必要なのかということを、お互いの立場やお互いの職業を通して考え、そして自分の心の畑を耕すという技を皆さんに勉強していただきたい。」と付け加えられました。

そして「芸術家は絵画や彫刻に専心することによって、人生の本当の姿を取り出すために努力するものです。前出のソクラテスの言葉を借りれば、『ただ生きることだけでなく、よく生きることを何より大切にしなくてはならない』。この“よく生きる”ということを皆さんは探索して勝ち取らなければいけません。芸術とは私たちが生きるためにある。生きるためにはアートが必要である。その一例として、ここからは私のアートとの関わりについてお話します。」と伝えた日野原氏は、ご自身の歴史とアートとの出会、関わりを重ね合わせ、次のようにエピソードをご紹介されました。

日野原氏のお父様は牧師をされており、日野原家では食事をする前に必ず賛美歌を歌うのが習慣でした。この賛美歌がアートに親しむという最初の出会いでした。10歳（1921年）の時、急性腎炎を患った日野原氏は、小学校を3ヵ月間休学することになります。安静を強いられたこの時期、母の勧めでピアノを習いはじめました。他にも習字やボーイズトリオの結成、岩田専太郎（1901-1974）の日本画に影響を受け絵画を楽しむなど、アートに親しんだと言います。スライドでは、小学6年生当時に描いた線画も披露されました。

関西学院中学部に進学した日野原氏は、級友たちとの歌唱活動や中学卒業時にはショパン「英雄ポロネーズ」の独奏など音楽活動にいそしみ、演劇へも参加するなど活動の幅を広げられました。1929年には京都第三高等学校に進み、医者を目指して勉強に励まれました。その間にも文芸部で小説や詩を書き、弁論部に入部するなど、幅広いアートとの触れ合いを楽しまれました。弁論部に入られたきっかけは「赤面恐怖症だったのを克服するためだった。」というエピソードも披露されました。

21歳（1932年）で京都帝国大学医学部に入学されますが、翌年結核を患い1年間の休学を余儀なくされます。療養の間、寝ていても何かできることはないかと考え、妹が聴いていたレコードのメロディーを、五線譜に書き起こすことで暇を潰したと言います。これが作曲の勉強につながり、その後ピアノの作曲なども行うようになりました。

1 美術学部特別客員教授の日野原重明氏
2 大勢の聴講者で熱気あふれる会場
3 小学校6年生当時に日野原氏が描いた線画
4 オーケストラを指揮される日野原氏（2012年）
5 ミュージカルに出演された際のショット（2013年）
6 日野原氏の水彩画作品
7 書道の展覧会も予定されているとか

ちなみに、日野原氏が作曲した曲は、現在CDなどで聞くことができます。「これも病気になったがための結果。苦難は後に恩寵を与えられると実感しました。」と当時を振り返られました。

大学卒業後、29歳（1941年）のとき聖路加国際病院の内科医として赴任することになりました。戦時中には聖路加看護専門学校の音楽教師の代理を務め、39歳（1951年）で米国エモリー大学医学部内科への留学を経験。さらに、58歳（1970年）のときには、世間を騒がせた『よど号ハイジャック事件』に遭遇するなどの体験もされました。この事件後「せっかく救われた命だから、この命を他の誰かのために使おう。」と日野原氏は誓ったと言います。その傍ら、海外出張の際には、多くの美術館を巡るなどでアートに親しみ、主治医として日本の芸術家たちに寄り添うことで、一層アートとの結び付きも深めていました。

61歳（1973年）でライフプランニング・センターを設立し、生活習慣病の視点から健康教育に取り組まれています。また、80歳（1992年）で聖路加国際病院院長に就任。その後起きた地下鉄サリン事件の際には、被害にあった640名の急患を受け入れるなどの迅速な救急活動は、まだ記憶に新しい出来事です。この間にもアートとの関わりは更に深まり、2000年には童話『葉っぱのフレディ』との出会いから、音楽劇『葉っぱのフレディ』を執筆し、同年舞台化を実現されました。

89歳（2001年）で日本音楽療法学会を設立。音楽は科学としての医学の前に癒しの術（art of healing）として、音楽療法により人がよりよく生きる手助けをしようと現在も活動されています。そして、その活動の一環として2012年にはオーケストラを指揮してみせました。さらに去る10月にはミュージカル『葉っぱの四季 フレディ』公演で手話ダンスを披露したばかりです。プライベートでは水彩画や書道、俳句などを始められ、なんと102歳でヘリコプターに搭乗されるなど、ますますお元気で、新しいことに日々挑戦し続ける日野原氏です。

最後に会場に詰めかけた大勢の聴講者へ、自らしたためた『夢を』という書を指示し「みなさん夢を持ってください。夢を持った生活が必要です。アートとは夢を持ち、実践する中でサイエンスも生まれるのだということを、皆さんの心の中に残ることを期待しています。」という言葉を贈り、この講演会を終えられました。割れんばかりの拍手の中、日野原氏は聴講者に手を振って会場を後にされました。

美術学部

第8回 CBC「翔け！二十歳の記憶展」で大岡優美さんがグランプリを受賞しました

「第8回CBC 翔け！二十歳の記憶展」で、本学美術学部日本画コース4年の大岡優美さんがグランプリを、大学院美術研究科2年の王 永好さんが準グランプリを、同じく大学院美術研究科2年の工藤千紘さんがCBC賞をそれぞれ受賞しました。

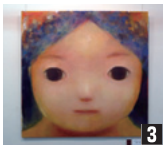
この展覧会は若者の芸術性を見出し、次世代の芸術家を支援するもので、中部日本放送・CBCラジオ主催、中日新聞社など後援で、毎年CBCスタジオギャラリー開催されています。2013年度は愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学の3大学から選ばれた絵画と立体作品30点が出展され、11月6日㈬～11月16日㈯

まで行われました。

展覧会に先立ち、11月5日に表彰式が行われ、今回は、本学以外では、愛知県立芸術大学から3名、名古屋造形大学から2名、合計8名の学生が受賞しました。

グランプリに輝いた大岡優美さんの作品は「ground」で、縦1450、横1120mmのキャンバスに「地面」をテーマとして描いたものです。この作品をどこかで発表できれば、と考えていたのでいい機会だと思い応募したそうです。「地面のひび割れ、床の模様、点字ブロック、小石、コンクリートの色合いなど、自分が描いてみたいと思ったものを組み合わせて描きました。その地面を人物が歩いているようなイメージの作品です。まさか賞を頂けるとは思ってもみなかったので、本当に驚きました。これもひとえにアドバイスを下さった先生方や、支えて下さった周りの方々のおかげだと感謝しております」とのお話しでした。

準グランプリの王 永好さんは、応募の動機として「私はガラス専攻なので、ガラスの面白さと自分の作品をもっと多くの人に見せたいと思い、二か月かけて集中して制作した作品を出品しました」とのこと。「自分の描いた絵をガラスの上に表現することができたら、自分らしい作品が出来ると思いこの作品を作りました。作品は二つあって、一つは「流れ」という作品で、この作品は浮かんでいるというか、踊っている海の生物たちが上からどんどん流れてくるという感じを表現したものです。もう一つは「生える」という自由自在に長生きをしている植物たちの作品です。これは、下からどんどん生えていくという感じを表現したものです。どちらも板ガラスを削って作りました」とのコメントでした。



1 大岡優美さんの作品「ground」
2 王 永好さんの作品「流れ」と「生える」
3 工藤千紘さんの作品「こもれび」

CBC賞を受賞した工藤千紘さんの作品は「『こもれび』S80号1455×1455mm」で、応募の動機、作品の内容、受賞の感想について、次のように語ってくれました。「尊敬している先輩方が出品していることが多かったので、出してみたいと思いました」、「子供の顔の絵です。自分の記憶の片隅に住んでいる、自分のような他人のような存在を描いています」、「受賞の発表の時に自分の名前を呼ばれたことにびっくりしました。良い作品を作る学生が周りにいてくれる環境の中で学生生活を送れているんだなと思いました」

グランプリに輝いた大岡優美さん、準グランプリの王 永好さん、CBC賞を受賞した工藤千紘さん、おめでとうございました。益々のご活躍を期待しています！！

デザイン学部

2013年度 アート＆デザインセンター 企画展が開催されました

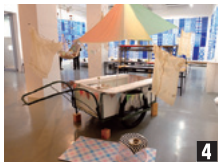
デザイン学部の特別客員教授による作品展「多彩なデザインの現場から・デザイン学部特別客員教授展」が、2013年10月25日㈮から11月2日㈯まで、西キャンパスのアート＆デザインセンターで開催されました。

デザイン学部では、デザインプロジェクトや講演会といった、長期にわたるプログラムやワークショップなどの実践的体験を通じ、学生の豊かな人間性や想像力を育むための教育プログラムの一環として、国内外を舞台に様々なデザイン領域で活躍するアーティストやデザイナーを特別客員教授として迎えています。

2013年度の特別客員教授には、鍛金彫刻家の安藤 泉氏をはじめ、建築家の大西麻貴氏、アニメーション演出・VFXスーパーバイザーの加藤道哉氏、graf代表・クリエイティブディレクターの服部滋樹氏、メディア/デザインプロジェクトのphono/graph、SOU・SOU 代表ディレクターの若林剛之氏ら、6組の名だたるクリエイターが務めています。

この企画展では、特別客員教授自身の作品に加え、学生と共に行なったワークショップやプロジェクトの成果も展示されました。特別客員教授の優れた作品に触れるとともに、デザイン学部の各コースの取り組みや手法を学び、新たな表現の可能性や創造力を膨らますことを主題としています。

この企画展を記念して、11月1日㈮には対談「デザイナーズトーク」（B棟大講義室）も開催されました。特別客員教授の服部氏と大西氏をゲストに迎え、学生たちと行なったワークショップの成果報告や今後の展開などについて意見を交えました。



1 トークイベント「デザイナーズトーク」より。右から服部氏、大西氏
2 若林剛之氏のワークショップでの学生作品（壁面）と商品
3 安藤泉氏の展示作品
4 大西麻貴氏のワークショップでの学生作品
5 加藤道哉氏の展示作品
6 服部滋樹氏のワークショップで学生が収集したもの

デザインマネージメントコースのプログラムを担当した服部氏は、名古屋芸術大学を起点にした近隣地域で生活する人にスポットを当て、地域の特性を表現するワークショップを行いました。具体的には、近隣で生活する人々を収めたドキュメンタリー映像を制作し、地域の人々を招いて上映会を行うことにより、より地域との繋がりを深めるものです。

対談の中で服部氏は、「地域の素材として人をクローズアップしたこのプロジェクトは、学生たち

Column NUA No.23

「ふたつの転換期、ふたつの芸術大学」

美術学部教養部会教授　長田謙一

バウハウスのときのようだ――名古屋芸術大学徳重キャンパスに歩み入るそのとき蘇えったのは、1984年の夏、当時は東ドイツに属していたワイマールとデッサウをバウハウス研究に訪ねたときに似た予感と感情だ。そのころの私は、近現代の美術・デザインの様々な個別的問題の中に分け入りそのつどつぶさに出会う事象に即して、自分が共に生きている時代／芸術／社会の把握へと向かわねばならないと考え、それまでのヘーゲル美学研究から自分なりの小さな転回をこころみて、文部省在外研究の1年間をドイツに過ごしているさなかだった。私のその転回軸を両端で支えたのが、デザイン＆美術のモデルネの歴史・理論研究と社会の次代形成つまり教育問題の研究であった。バウハウスはモデルネのクリスタルなハイライトに位置すると同時に芸術-教育におけるハイライトでもあった。バウハウス校舎を案内されながら、感じていたのは、これから自分の向っていこうとする諸課題の起点でもあり、また集約点ともなるであろう場を今踏みしめているのにちがいないという昂揚感だった。

考えてみれば、バウハウスは、20世紀に入って高まった芸術大学改革そのものの象徴的存在であった。ワイマールに限ってみても、その地にはバウハウスに先行して、ゲーテ時代の王立自由素描学校、1860年設立の美術学校や1902年以来アンリ・ファン・ド・ヴェルドの工芸ゼミナールを受け彼を校長として1908年に開設されたザクセン大公ワイマール工芸学校、1910年にヴォルプスベーデのF.マッケンゼンを学長に迎えて美術・工芸を総合したザク

が大学周辺の人にコンタクトを取り、この地域での暮らしについてインタビューをし、それをドキュメンテーションしながら映像化するということを行いました。

作品としては8本の映像に仕上がっていますが、実際に調査した対象は30件にも及びます。

今回の企画展では、取材地域で使われていた道具など、地域で収集した物の展示とドキュメント映像を、協力いただいた地域の方々の顔写真パネルとともに展示することで、単なるドキュメントでは終わらず、現代を考察する“考現学”に近い物の収集方法と、その考現学を越えるデザインによる現代の暮らし向きを、展示で表現できたのではないでしょうか。」と振り返りました。

また、“移動することができる小さな建築”というテーマに取り組んだスペースデザインコースを担当した大西氏は、「今回のワークショップでは、学生たちのアイデアを3案に絞り、チームに分かれて実際に作ってみました。落ち葉の山に寝転がるのは気持ちいいといった観点から、木にハンモックを吊るし、そこに落ち葉を受けて寝転がる『落ち葉のプール』という作品や、衣類が乾くまでの時間を移動して快適に過ごすことを楽しむ移動式洗濯スペース『Sunshine Cleaning』、少しのパーツを足すことで事務机をジャングルジムのように組み上げ、屋台や食卓・イスに変化させることで、コミュニケーションが生まれる空間づくりを目指す『ユニット式事務机』など、とてもユニークな移動する建築ができあがりました。このワークショップを通じて感じたことは、名古屋芸術大学の学生たちは、ものすごく手が動くということです。本当に感心しました。」と、学生たちにとって嬉しいコメントをいただきました。

今回の企画展は、6分野の異なるデザインワークから、他分野についての理解を深め、その手法を参考に自分の仕事に置き換えて実際に手を動かしてみる。学生たちにとってそんな良い機会になったのではないでしょうか。

学校法人 名古屋自由学院 グループ校特集
滝子幼稚園

滝子幼稚園では、1年を通じて季節の移り変わりやその季節ならではの自然を十分感じて欲しいと願い、保育を展開しています。毎年、秋になると幼稚園北門に植えてある金木犀がうっとりと良い香りで子どもたちの登園を出迎えてくれます。次第に園庭の木々も色づき、色鮮やかな葉っぱを落とし、子どもたちに秋の自然物をプレゼントしてくれます。子どもたちは、まるで宝物を拾い集めるかのように、金木犀の花びらや色づいた葉っぱを集め、ご馳走作りや製作遊びなどを展開します。

そんな中で今年は、子どもたちが園庭の柿の木に注目しました。この木は以前から渋柿だという噂があり、実をつけても大人の先入観で鑑賞用にしていて、採って食べてみようとはしませんでした。しかし、ある研修会に教員みんなで参加したことがきっかけで、「もっと子どもたちの興味や関心に寄り添っていこう。」と考える機会を頂きました。また滝子幼稚園では、「遊びが学びだ。遊びながら様々なことを体験し興味や関心を広げ、日常の色々な出来事とリンクして多くのことを認知、理解し学びの意欲を育てていくことが大事。」と考えています。より主体的で意欲的な遊びを支え、学びの芽を大切に育もう！と話し合い、以下は、そんな保育実践の記録です。

保育実践記録「あの柿の実、甘いかな？ 柿狩り大作戦」

年中の先生と子どもたちが「秋見つけ」を楽しんでいると、「先生、秋見つけた。柿の実が赤くなってるよ。」「あの柿、美味しいかな？」「どんな味かな？」「採ってみようか？！」と話が弾み、周りの子どもたちを巻き込んで、柿狩り大作戦が始まりました。順番に柿の木に登ってみるのですが、ツルツル滑ってなかなか実をつけている枝までいけません。年長の子どもも加わって、長い棒を持ってきたり、枝にボールをぶつけてゆらしてみたり、悪戦苦闘しながらも大興奮で柿狩りを楽しんでいました。何十分も経過した時、やっと一つ熟した柿の実を収穫することができたのです。大喜びで職員室まで掛けてきて、柿が採れたと大騒ぎでした。子どもたちは味見を楽しみに、手を洗って一列に並び長い列ができました。「甘いかな？渋いかな？」とドキドキワクワクでしたが、一口食べてみると甘くて美味しくて、飛び上がって喜んでしまう程でした。子どもたちは、一口ずつ味わうと「甘い！おいしい！」「もっと採ろう！」と一目散に柿の木の下に戻っていきました。でもやっと一つ採れた柿でしたので、その時間はそこまでで、またのお楽しみになりました。

ところが、帰りのバス待ち保育の時間に今度は、年長の子どもたちが、柿をいくつか収穫したのです。朝の柿ほど熟れていませんでした。でも「食べたい！」のリクエストに応え、切り分けて一口ずつ頬張ると、なんと今度は、渋い渋い柿だったのです。子どもたちと笑いながら口をゆすぎ、「渋いね！」「これが渋柿なんだね」と朝の美味しい柿と渋柿の違いを体験しました。その違いは大きな驚きでした。そして「渋柿は剥いて干しておくと甘い干し柿になるよ。」ということも知り、ある先生が干し柿の見本を持って来てくれたことがきっかけで、干し柿作りにも挑戦することになりました。干し柿を作る為に再び木登りして柿を収穫し、剥いて、1階の保育室前に干しています。本当に渋い柿から甘くて美味しい干し柿が出来るのか？半信半疑の実験中です。とっても楽しみです。他にも秋に実をつける果実へと興味が広がっていくと、さらに学びが深まりますね。お芋掘りもみんなで楽しみました。

今回、子どもたちと大切なことを沢山学びました。柿狩りを楽しむ子どもたちの輝く瞳や一口味わったあの瞬間の口に広がった美味しさ、友だちと共有した気持ちは何よりの宝物です。秋の自然がくれた贈り物に感謝です。桃栗3年、柿8年と言われます。この日の為に何年も前に柿の木を植えて下さった方にも感謝です。そして既に季節は移り変わろうとしています。冬の自然がくれるプレゼントも子どもたちと一緒に楽しみ、色々感じて素敵な学びにしたいと思います。

センン大公ワイマール美術大学が設立されていた（音楽では1872年にフランツ・リスト・ワイマール音楽大学が設立され今日に続いている）。第一次大戦後の1919年、この歴史を継承／切断して、グロピウスの高く掲げる諸芸術の新しい総合の理念のもとにワイマール国立バウハウスが設立されたのであった。しかしそのバウハウス自体が1925年デッサウに移る際には、設立期に強かった中世ユートピア的響きを払拭して、そのガラスの壁面は、産業をも含めたさらに新しい綜合をめざしたモダンの輝きに照り映えたのだ。そしてこれが戦後世界各国の造形大学改革・設立までをも先導していった。本学の「ファウンデーション」もその遠いこだまなのだ。しかしその後、芸術大学は、1968年をはじめ新たないくつもの改革の波に襲われた。とりわけ21世紀を迎えて以降、芸術諸領域をもつつみこむ巨大な社会変容のすすむなかで、世界の芸術大学も、S.H.マドッフ（編）『芸術大学――21世紀への提案』も示すように、1920年代以来の大きな変革期を迎えるに至っている。

本学西キャンパスに歩み入りながらバウハウスを想起したのは、人間的スケールを保ったキャンパス

「バウハウスの窓」（撮影:筆者1984）

が共通するからだけではない。ここが時代の新しい課題に応えて自らを変革する芸術大学となることへの期待と予感――それが30年前の初めてのバウハウス訪問の記憶を呼び起こしたに相違ないのだ。

マスター to アーティスト

【第23回】

＜自己の主張＞

大崎正裕 大学院美術研究科 美術学部教授

（おおさき　まさひろ）

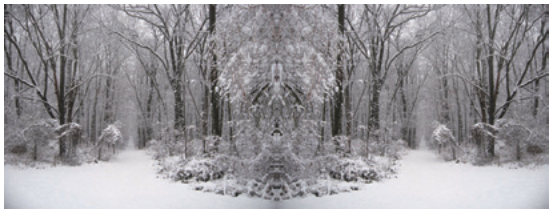
1949年　長崎県生まれ
1972年　愛知県立芸術大学美術学部絵画科卒業
　　名古屋芸術大学教員
1992年　愛知芸術文化協会会員
1997､8年　ミシガン大学アナーバー校客員研究員

1997年　個展　メディアユニオンギャラリー（ミシガン）
2002年　「The Source」ギャラリーキャプション（岐阜）　ギャラリー16（京都）
　　「Japan at this Moment」　Gallery VARTA（ヴィリニュス･リトアニア）
2003年　「エゴベリー展」　ハンプシャー大学（マサチューセッツ）
2006年　「形式と拓」展　北京中央美術学院（中国）
2010年　個展「肖像portrait-存在と記録-」
　　MATSUO MEGUMI+VOICE GALLERY pfs／w（京都）

氏が制作したインスタレーション作品については、展覧会の案内や紹介された記事などから概要を知ることができる。インターネットで検索すれば作品の写真や展示されている様子などを見ることもできる。しかし、絵はない。若き日に打ち込んでいた油彩画はどこにもない。どんな絵を描いていたのか、わからない。専門であった油絵について伺うと、返ってきたのは意外すぎる言葉だった。「処分しました。作品が気に入らなかったんですよ。気に入らなくて、すべて処分したんです」

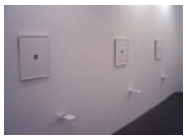
長崎県に生まれた。近隣には美術館もなく、大きな展覧会も見たことはなかった。美術に触れる機会は少なかったが、絵を描くことと建築設計が好きだという思いだけで美術の道に進んだ。高校では美術部に所属したが、石膏像もないような具合だった。それでも研鑽に励み、愛知県芸の油画に入学した。倍率６０倍ほどと現在よりも狭き門の頃である。大学では島田章三氏（愛知県立芸術大学名誉教授）や大沼映夫氏や笠井誠一氏に師事し、精励恪勤した。「それほど美術に触れる機会もなかったので、日本画と洋画の区別といったことにも意識は低かったですね。こだわりもないまま自然と洋画を選んでましたね。大学に入ってすぐに、島田先生に褒められたことがあって、それが発憤材料になって打ち込みました」

大学の卒業と同時に本学の助手になるが、恩師である大沼先生の「一生絵に関わっていくのなら大学に勤める方がいいじゃないか」という言葉に後押しされたためだった。本学創設３年目の頃で、建物といえば現在のＡ棟と食堂がある程度、Ｂ棟は建築中だったという。設備はもちろん、カリキュラムも足りないものばかりであった。不足しているものを、できることから一つずつ揃えていこうと奮闘が始まった。洋画の基礎となる溶剤や画材の専門家（組成学）を教員として招いたり、また、見よう見まねだったが４版種が揃った版画工房も作った。さらに現代アートや版画について教えられる指導者を、自分の大学時代の先生や先輩を頼り紹介してもらった。大学らしく、芸大らしくなるよう、ブロックを積み重ねるようにして作っていったという。



2012年
「存在の記憶」
-他者の眼、自己の眼-

2010年　「肖像portrait-存在と記録-」
肖像写真とその下に被写体それぞれの身の回りの品や家族などの写真が散りばめられる。
写真の横には鏡があり、作品を見ている自分が映り込み、他者の眼に映る「わたし」を確認する。



2007年　白い虚像「小さな存在」

2013年　バタフライハグ展（小柳裕氏、D.D.、横内賢太郎氏、他）
　　アートラボあいち（名古屋）
2013年　ア゛ーッ! ラジオスピンオフ&ウ・ラジオストック博物館出張 企画
　　ウ・ラジオinバタフライハグ活動に参加　アートラボあいち（名古屋）

其の他、個展（企画展）　ギャラリーウェストベスコズカ〈名古屋〉にて多数。
グループ展（企画展）　ヴォイスギャラリー〈京都〉やギャラリーなうふ〈岐阜〉など。

＜主な展覧会計画＞
1996年　「素材のもつ意味」（やなぎみわ氏 他 出品）
　　ギャラリーMOCA（名古屋）
1998年　「臨書」メディアユニオンギャラリー（ミシガン）2000
2000年　「ハッピーバイオレンス」（会田誠氏 他 出品）
　　名古屋市市政資料館（名古屋）
2011年　neWs展（吉本作次氏、他）アートラボあいち（名古屋）

ア゛ーッ! ラジオ2013
（監修:大崎正裕）
http://aa-radio.jimdo.com/
Ustreamではア゛ーッ! ラジオ2013の一部、
aa-radio2012も視聴できます

そうした教員としての業務の傍ら、自分の作品作りにも励んだ。しかし、ある芸術団体に所属するようになり、何かが変わっていった。人間関係もさることながら、作品の内容に違和感を持つようになっていった。そして、団体とは距離を置くようになり個展を中心とした活動になっていくのだが、絵を描くこと自体がつらくなってしまったという。現代アートに影響を受けながら、徐々に伝統的な絵画からは離れていった。そして、これまで描いた作品を処分してしまう。３０代半ばの頃である。

穏やかに語るが、壮絶な決意があったに違いない。すべてを断ち切るために、それまで打ち込んできた制作してきた作品をすべて処分したのだ。本人は気に入らなかったからというが、そんな簡単なことではなかっただろう。作品を捨てることで自分の中の何かを守ろうとしたのではないだろうか。

絵画、立体、音楽、おおよそ芸術作品には、作者・演者の自己が何かしらの形で投影されているものである。良きにつけ悪しきにつけエゴイスティックなまでに作者・演者の思考が投影されている作品は数多い。氏の制作する作品はその対極にあるように感じる。しかし、その静かで内省的な世界には、想像できないほどの激しい自己の主張がしっかりと横たわっているのではないか。「人があって自分があるわけです。他者があって初めて自分を認識するんです」 作品世界は、他者を見ることによって、作品を見る自分を意識するように仕組まれている。そして、作者が自分を確かめるように、作品を見る者も自己を感じるのである。

姿勢はプロディースにも共通している。「人が活きて、初めて自分が活きる。そう思うんですよ」 黎明期の本学洋画科を築いていったときと同じである。意志のある者がいれば、その場所に環境を整える。作品自体に意見するような手法ではなく、作者の考えをできるだけ尊重し実現に向けて制限をできるだけ外していく。作家の個を尊重しながら、ぶつかり合うことなく、それでも確かに存在するプロデューサーとしての個。すべてを受け入れるようでいて、なにものにも侵されない強烈な個がそこにある。

Information
インフォメーション

『アワード』

Award NUA

※順不同、報告のあったものの中から、誌面の関係で一部だけを掲載しています。

■デザイン女子NO.1決定戦
2013NAGOYA
〔デザイン女子NO.1〕
2013年デザイン学部卒業生
加藤千恵さん

■第1回 堀美術館N/ASCA展2013
〔優秀賞〕
2013年デザイン学部卒業生
山田麻由さん

■第10回 小磯良平大賞展
〔準入選〕

■第77回 新制作展
＜絵画部＞
〔新作家賞〕
大学院美術研究科1年生
山口蒼平さん

■第63回 中日書道展
〔準特選〕
美術学部洋画2コース2年生
飯田美穂さん
デザイン学部1年生
宇佐見友里さん
人間発達学部2年生
岡野愛佑香さん

■第8回 ジェームズダイソンアワード
＜日本の第一次（国内）審査＞
〔日本最優秀賞〕
2013年デザイン学部卒業生
Phua Wei Qiang Frederickさん

■第8回 翔け！二十歳の記憶展
〔グランプリ〕
美術学部日本画コース4年生
大岡優美さん
〔準グランプリ〕
大学院美術研究科2年生
王　永好さん
〔CBC賞〕
大学院美術研究科2年生
工藤千紘さん

■第6回 岐阜国際音楽コンクール
＜管楽器部門 大学・一般の部＞
〔文化人特別賞〕
音楽学部弦管打コース3年生
武田璃穂さん
＜打楽器部門 大学・一般の部＞
〔審査員特別賞〕
2012年大学院音楽研究科器楽専攻修了生
川村法子さん
＜コンチェルト部門 大学・一般の部＞
〔一位〕〔岐阜市長賞〕
音楽学部ピアノコース4年生
碇　大知さん
＜ピアノ部門 大学・一般の部＞
〔一位〕〔岐阜市長賞〕〔審査員特別賞〕
大学院音楽研究科器楽専攻1年生
戸田　恵さん

■第7回 横浜国際音楽コンクール
＜管楽器部門 大学の部＞
〔一位〕
音楽学部弦管打コース3年生
林 里紗さん
＜弦楽器部門 大学の部＞
〔審査員特別賞〕
音楽学部弦管打コース3年生
城間拓也さん
＜管楽器部門 大学の部＞
〔二位〕
音楽学部弦管打コース4年生
高田翔梧さん
＜ピアノ部門　一般の部＞
〔二位〕
2008年音楽学部ピアノコース卒業生
直江慶子
＜管楽器部門 一般の部＞
〔四位〕
2013年音楽学部研究生在籍中
田中沙紀さん

■第16回 長江杯 国際音楽コンクール
＜管楽器部門 一般の部＞
〔四位〕
大学院音楽研究科器楽専攻1年生
浅井美帆さん

■第16回 日本フルートコンヴェンション
コンクール
＜アンサンブル部門＞
〔銀賞〕
音楽学部弦管打コース4年生
佐藤千春さん・新野智子さん

■第5回 各務原音楽コンクール
〔最優秀賞〕
2009年音楽学部ピアノコース卒業生
荒谷（旧姓 服部）あさみさん

■第2回 名古屋音楽コンクール
＜管楽器部門＞
〔二位〕（一位なし）・〔現代音楽特別賞〕
2013年音楽学部研究生修了生
松本有可さん

■第15回 日本演奏家コンクール
＜ピアノ部門 一般の部＞
〔第二位〕〔名古屋市教育委員会賞〕
2010年音楽学部ピアノコース卒業生
和田（旧姓 浅野）紋加さん

■第14回 大阪国際音楽コンクール
＜デュオ部門＞
〔三位〕
2013年音楽学部弦管打コース卒業生
勝田晴香さん
＜アンサンブル部門＞
〔エスポワール賞〕
2009年音楽学部弦管打コース卒業生
山田麻由さん
2010年音楽学部弦管打コース卒業生
吉沢香純さん
2011年音楽学部音楽総合コース卒業生
高畑早希さん

■第1回 山田貞夫音楽賞
＜ピアノ部門＞
〔特選〕
2012年大学院音楽研究科ピアノ専攻修了生
水野佐紀さん

■第10回 シャトウー国際ピアノコンクール
［第2位］［日仏友好賞］
大学院音楽研究科器楽専攻1年生
戸田　恵さん

2013年度 美術学部・デザイン学部卒業制作展、大学院修了制作展

第41回 卒業制作展
日　程/2014年2月25日（火）～3月2日（日）
会　場/**愛知県美術館ギャラリー**（愛知芸術文化センター8階）
時間：10:00～18:00
（金曜日は20:00、日曜日は17:00まで）
名古屋市民ギャラリー矢田
時間：9:30～19:00（日曜日は17:00まで）
名古屋芸術大学西キャンパス
時間：10:00～18:00

卒業制作展記念講演会
日　時/2014年3月2日（日）14:00～16:00（予定）
会　場/愛知芸術文化センター12階　アートスペースA
講　師/宮田亮平氏（東京藝術大学 学長）
×仲居宏二氏（聖心女子大学 教授）
演　題/「明日のアート」

第18回 大学院修了制作展
日　程/2014年3月4日（火）～3月9日（日）
会　場/名古屋市民ギャラリー矢田
時　間/9:30～19:00（日曜日は17:00まで）

2013年度 音楽学部演奏会スケジュール（2014年2月～3月）

※予定につき変更になる場合がありますので、事前にご確認ください。
お問合せ先／名古屋芸術大学音楽学部演奏課（0568）24-5141

2月

研究生修了演奏会
日　時/2月4日（火）18:00開演予定
会　場/電気文化会館ザ・コンサートホール
入場料/無料（全自由席）

第12回 歌曲の夕べ
日　時/2月8日（土）18:00開演予定
会　場/HITOMI HALL
入場料/無料（全自由席）

ピアノのしらべ 第18回 春のコンサート
日　時/2月13日（木）17:30開演予定
会　場/電気文化会館ザ・コンサートホール
入場料/無料（全自由席）

大学院音楽研究科特別演奏会
日　時/2月20日（木）17:00開演予定
会　場/電気文化会館ザ・コンサートホール
入場料/無料（全自由席）

アンサンブル・フィラルモニク・ア・ヴァン 第15回 定期演奏会
指　揮/ヤン・ヴァン デル ロースト
小野川　昭博
日　時/2月24日（月）18:15開演予定
会　場/江南市民文化会館大ホール
入場料/1,000円（全自由席）

Kaleidoscope2014
日　時/2月27日（木）開演時間未定
会　場/愛知県芸術劇場小ホール
入場料/500円（全席自由）

第41回 卒業演奏会
日　時/2月28日（金）17:00開演予定
会　場/三井住友海上 しらかわホール
入場料/無料（全自由席）

3月

第16回 大学院音楽研究科修了演奏会
日　時/3月6日（木）18:00開演予定
会　場/三井住友海上 しらかわホール
入場料/無料（全自由席）

ミュージカル公演
日　時/3月7日（金）開演時間未定
会　場/アートピアホール
入場料/1,000円（全自由席）

オペラ公演
日　時/3月8日（土）18:30開演予定
会　場/三井住友海上 しらかわホール
入場料/無料（全自由席）

チケットお取り扱い場所
●名古屋芸術大学 音楽学部演奏課 Tel. 0568-24-5141
●愛知芸術文化センター B2F プレイガイド Tel. 052-972-0430
●ヤマハミュージック 名古屋店プレイガイド Tel. 052-201-5152
●カワイ名古屋 Tel. 052-962-3939

表紙の写真

安部孝 准教授
（人間発達学部 子ども発達学科／クリエ幼稚園 園長）

クリエ幼稚園 愛園会（在園児の保護者の会）主催による子育て講演でのひとこま。武田鉄矢の歌の歌詞を引きつつ、育ちに応じた褒め方、叱り方を解説。講義とはまた異なる、入りやすい話に若い母親たちも熱心に聞き入る。大教室の一郭にはキッズスペースが設けられ、時折、子どもの遊ぶ声に会場が和らぐ。
（2013年11/14　東キャンパス 1号館 701 アッセンブリホールにて）

発　　行：名古屋芸術大学
企画・編集：全学広報誌編集委員会
デザイン・協力：くまな工房一社
印　　刷：㈱クイックス
発　行　日：2014年1月27日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学　広報企画部
〒481-8502
愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
電話　0568-24-0359
FAX　0568-24-0369
E-mail：grouptu-shin@nua.ac.jp

Japan University Accreditation Association
since 1947
UNIVERSITY ACCREDITED
2011. 4～2018. 3

大学基準協会の認定評価を再取得しました

本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再度取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。

※記事中のホームページアドレスは、掲載先の諸事情で移転や閉鎖されている場合がございます。あらかじめご了承ください。